

しなんがは

自伝小説

脳性小児マヒと母の愛



金沢幸

し
な
ん
が
は
信濃川

金沢幸一

しなんがは
信濃川 金沢幸一

発行者 赤坂 武

発行所 弘済出版社

東京都豊島区北大塚二一六―六 郵便番号一七〇
電話 東京(〇三) 九一八―六三二一 振替 東京二―八三二一

© Kōichi Kanazawa 1978, Printed in Japan
カバー装幀 マサ・クリエイト

落丁・乱丁本はお取り替えます。

0093—845098—2228

亡き母に捧げる

信濃川／目次

I	母の名を綾子と言った	5
II	父の名を良造と言った	27
III	子供の名は元一郎	48
IV	祖母の名はマツと言った	68
V	妹は香和子と言った	84
VI	元一郎と小学校	118
VII	元一郎と仲間達	141
VIII	元一郎と中学校	183
IX	元一郎と青春	197

I 母の名を綾子と言った

1

河はその源を信州の山奥に持っていた。幅広いゆるやかなうねりを見せる大河の氾濫により、ここ米所越後平野は、毎年のように洪水にまわられた。そのたびに、この地方はますます肥沃になっていった。

どす黒く濁った水がさかまきながら、川幅いっぱい鈍く大きく音をたてて流れ行くさまを、土手で見ているだけで背筋が寒くなった程である。とりわけ晩秋のそれは、他の季節とは比べようもなかった。

見わたす限りの冬枯れの中で、たれこめた雲を見つめながら、人々は祈るようにして初雪を迎える。それと時を同じくして、茫漠とした自然の中で、秋は凍え死ぬのである。

昭和十九年秋

太平洋戦争はその激しさを増し、ここ越後のほぼ中央にあたる長岡にも、敵機が異様な姿を幾度となく見せ、人々を震えあがらせていた。

市の外れを南から北へ信濃川が流れる。その土手を二つの人影が、まるで川の流れに逆らうようにして、黙々と足を南に進めていた。二人とも大きな荷物を背負い、その上、片方の手には、相当重そうな風呂敷包みを提げていた。冷たい川風を正面に受け、ややもすると櫛で押さえた髪が吹きちらされるようにあおられ、少しばかり歩みを押さえてしまう。

だが、前後して歩く二人は、遠くからは女には到底見えないいでたちだった。年配の女の後に続く若い女は、その息子良造の嫁で名を綾子と言ひ、近くで見れば孕んでいることからも、男と見間違ふことはなかった。義母マツは綾子を庇いながらも、非情の冷気に気負されたかのように、押し黙ったまま歩き続けている。

空は今にもちらちらと初雪が降り出しそうな鉛色。その下をいくつかの黒い点が、鈍い音を伴って走って行く。

「また、米軍機が飛んで行く」

吐き捨てるようにマツが言った。

綾子も足を止めて、それらが市内を掠め北の空の中へ消えて行くのを見届けるように、じつと眺め、ほっと深い溜息をどちらからともなく吐き、また二人は歩き出した。

時折、道は急に狭くなる。それに加えて悪いことに、昨夜来の雨で道はぬかるみ、いくつもの水溜りがいたる所に出来ていた。

荷の重さに喘ぐ二人には、目に映る全てのものが生氣を失

っているように見えた。

たった一つ取り残されたかのように、ぼつんとなっている真つ赤に熟れた柿の実や、すっかり刈り取りを終えたどの稲株からも、弱々しく何本か出している細い芽も、雲の間から漏れる陽光と共に、冬の開演を告げているようだった。

身にしむ木枯らしと、川風の中を歩いた数時間が二人を疲労させていた。もはや、そこに長岡はなかった。目指す塚山という小さな村落が、すぐそこにあった。

綾子はそこで生まれ嫁ぐまでそこで育った。冷えびえとしているが、それでいて何か安堵のある静けさが綾子を取り巻いた。たいして長岡から離れていないのに、ここには戦争がないかのようにマツは感じた。荷の重さも忘れて、二人はしばし村の入口に立ちつくした。

「綾子じゃないか？」

突然、二人の後から太い声をした。びくつと振り返った。

二人のすぐ側に、胡麻塩頭の六十がらみの男が立っていた。

「おじさま」

思わず綾子の口から永らく使ったことがない言葉が無意識に出た。

一箇所しかない診療所や、分教場の先生などを除けば、村人の中で様づけで呼ばれている者は、この男の他に村の一番奥に住んでいる神主だけであった。しかも、村人は誰もがその老人にペコペコ頭を下げ、いつも少しでも良い道を譲って、

脇へ身を退いた。それは今に始まったことではなく、昔から庄屋であり、そのまま代々村主としてこの地方を統轄してきたためであった。

村を少し入ると高台に、その老人の家が見えた。屋根葺きが変わっている他は、嫁ぐ前とちつとも変わっていない。母屋を巡らす丈高い榎松にも、土塀にも、毎年のように全て冬開いがされていた。三人が歩いている道からその土塀の門までは、楽に百メートルはあり、その両側に一間間隔で見事な松が植えられていた。

綾子は村にいる時、日に一度は必ず庄屋の松並木の中を通った。それは照子と言う同い年の子がいたからである。綾子と照子は、学校がずっと一緒であったが、通称権助どんで呼ばれている綾子の実家は、庄屋の青地と全てが比べものにならなかったし、二人の家はそれ程近くなかった。にもかかわらず、なぜか二人はとても仲が良かった。

兄妹の中で一番庄屋育ちを感じさせる照子は、色白で整った顔をし、長く豊かな髪をいつもきちんとしていた。そして、体が弱かったせいもあってか、ほとんど部屋に引きこもって、琴を奏でたり、茶を立てていた。それらは小作の娘にはひどく贅沢に思えた。綾子は照子が羨ましかった。しかし、結婚で離れ離れになるまで、二人は一度も諍いをしたことがなかった。結婚は照子の方が一年以上早かった。

父を早く失い、女手一つで育てられた良造は、学校を卒業すると同時に、母マツが細々と営んでいた精肉店の跡を継いだ。綾子は、その良造に遠縁だということが取り持つてごく平凡な見合により嫁いだ。その婚礼は、戦時中でもあって、大変質素なものであった。それに比べて、照子のそれは、村の鎮守の祭りよりも盛大に行われた。それもそのはずだった。彼女は兄妹達も羨むばかりの所へ嫁に行ったのである。

戊辰の役などで長岡とも関係が深く、会津若松で手広く会津焼を生産している、由緒ある豪商に嫁いだのである。

——その後、綾子と照子の間には、綾子から一本の手紙が送られただけであった。

「そーう、照ちゃん男の子が産まれたの」

青地の老人から初めて照子の出産を知らされた綾子は、自分のことのように顔を赤らめた。

「ころころ太った子供らしい」

村主も初孫に嬉しさが隠せないようだった。マツもじょういなく彼に合槌を打った。

「また五月にもう一人産まれるんだ」

「照ちゃんに？」

「ああ」

青地は誇らしげに答えた。

「それはお楽しみですのお」

マツが口をはさんだ。

でこぼこした道に沿って、まばらな家並が続く。その中でひととき竹林の中にある庄屋の屋敷が壮観であった。

青地は、松並木の入口で二人と別れた。

このあたりでは杉木立で見えないが、遠くに綾子の家の屋根が部分的に見えてくると、さすがに心が弾んだ。

出入口から真っ直ぐ台所に続く間の土間が、やけに陰気臭く感じられた。

〈嫁ぐ前もこんなに暗かったかしら……〉

以前と少しも変わっていないのに、どうしてか、一年ぶりに訪れた実家の全てがよそよそしかった。家には、未亡人の母親トメと、十五歳になったばかりの妹和代がいるだけで、気を使う者は誰一人としていないのに、綾子は落ち着けなかった。

だが、兄の一郎も、弟の政雄も戦地にとられて、何かと心細かったトメと和代の顔に、ありありと嬉しさを読み取るこ

とが出来た。

「二人だけであつたら、随分お寂しいでしょうのお？」

マツがねぎらうような目で言った。

「もう慣れましたがお。それでも、これから春になるというのなら、まだ何か暖かいものが先に待っているような気がするんですが、それが、冬に向かうんだから、何か本当

に……。その上、荷車の音はおろか、子供達の声も聞こえないぐらいで、時計の音ばかりが耳に付いてのお」

先程までの嬉しさを隠すように言った。

「本当だのお。ここにいたら、飛行機の爆音も聞こえないのお」

この地方では、丁寧^{ていねい}に話する時は、決まって語尾に「のお」を付けて喋った。

「まだそんなもの聞いたことがないのお。だあすけのらに出ていると、戦争なんて少しばかり忘れてしまうでのお。家に帰って来て男衆がいらないのに気付くと、ああ戦争なんだなあと思うぐらいのお」

トメは、ふっと寂しそうな目を前に組んだ両手に落とした。

「みなさんどちらの方へ？」

「一郎も政雄も南方の方ですがのお。一緒の隊ではないんのでのお。……それより、良造さんは？」

「あの子も外地ですがのお。南方じゃあなくて、大陸なんでお……」

息子を戦地に送り出している二人の母親は、その他に何もつけ加えなくても、互いの気持ちが十分理解でき、慰め合うことができた。

長岡に比べて、塚山の夜は幾分冷たかった。入浴を済ませて、丹前に着がえたマツが茶の間に入って来た。

「ああ、いいお湯であった」

三日前の長岡での銭湯のように、空襲警報や入浴時間等を心配せずに入れる風呂は、足の疲れを癒すにこの上もなかった。その上、外は全く静かで物音一つ聞こえない。こうしている間に、南の空の下では、息子や夫が、血みどろの戦いを繰り広げているのだとは、どうしても信じられなかった。

その晩の食事は賑やかであった。

それぞれ胸に抱く思いこそ違え、戦争という暗黒の中で、こうして笑い声すらたてて食事を共に出来ることが嬉しかった。トメや和代にとって、息子や兄達と一緒にいるような気持ちで、楽しく食べることが出来たのは、マツと綾子の御陰であった。

夕食後、炬燵を囲みながら、四人は少しばかりの落花生を剥いた。

話が途切れて、一時の沈黙^{しんもく}があった。

それぞれ誰かが何か言い出しはしないかと、待っているような一時であった。

「——おばさん、戦争勝つと思う？」

和代がふと、独り言のように訊いた。

短い沈黙の後で、マツが言った。

「そりゃあ勝った方がいいけど、はっきりとはねえ……。ただ、みんなが生きて帰って来れば、それでいいと思うがねえ」

それはマツの本音であった。勝っても負けてもいい、良造

やその他の人々が、生きてさえいてくれたなら……。

誰の胸も同じ思いで、ふけて行く初冬の夜のような暗さで、固まっていた。風が吹いているのだろうか。時折、雨戸を叩くかすかな音が、再び沈黙に包まれた茶の間に流れ込んで来る。

「和代ちゃん、日本は絶対に勝ちますよ。日本には天皇陛下様がついていて下さるんですもの」

そう言うマツの声を、三人は黙って聞いていた。

風の音が強くなった。炬燵でじっと動かない四人の周りを冷たい隙間風が通り過ぎて行く。里にももう雪が降るのであるうか。

3

綾子が出産と疎開を兼ねて塚山に来てから、すでに相当の日々が過ぎ、消えては積もり、積もっては消えていた雪も、いつしかこんもりと根雪になっていた。

長く激しい戦いの陰にいて、サイレンや飛行機の音にも煩わされないで生活が出来るこの土地を、綾子は有難いと思った。それに加えて、何の気兼ねもなしに何事も出来ること、この上ない喜びであった。

綾子は横になっている事が多かった。

そうした時、明日をも知れない戦場で、悲惨な戦いを繰り返しているだろう夫や兄弟の事を考えるのが常だった。それ

らは、いつも彼女には最悪の状態になるように思えた。

そんな時、腹の中で動くものを感じると、一時にしろ、その鼓動は綾子の頭から戦争を忘れさせてくれた。

「産まれてくるんだわ。かわいい女の子かしら、それとも、きかん気の強い男の子かしら」

出産前に誰かが考えることを、綾子も幾度となく想像した。素敵な思いが頭の中を駆け回るとおもうと、すぐまたそれを吹き消すようなものが頭を過ぎる。

「立派な元氣な子を産んで、夫を安心させてやらなくては！」

今の綾子にとって、それが何よりも大事なことであった。生きて復員するかどうか、当てのない良造の安否を氣遣いながら、間もなく産まれてくる子のが、頭から一時として離れなかった。

「男でも女でもどちらでもいいわ。ただ五体満足に産まれてくれさえすれば。そして、あの人が元氣に戻って来てくれれば」

最後にはいつもこのことに到達し、同じことを神に祈った。何の信心ごろもない綾子が、床の中で手を合わせて祈るのは、やはり初産の不安からでもあった。腹の中の子供は、日に日にしだいに激しく動き回った。そして、時には障子を通す光も暗い朝早くから動き出し、綾子はそれで思わず目を覚ますこともあった。

「ああ、いやな夢だったわ」

綾子は懸命にそれを忘れようとした。が、そうすれば思うほど、その夢は前にもまして、はつきり思い出されるのである。

《県下でも特に信濃川の周辺に多く発生する恙虫病で、数年前にこの世を去った父の引く荷車には、後は脱穀すればいいだけの稲が車からくずれ落ちるのではないかと思えるほど積まれていた。どうしたとか、その稲の上では、父よりも力持ちの弟の政雄があぐらをかいていた。小川に沿って狭い田圃道を、額に汗して父は一人でそれを引いていた。前進するに従って道は一層細くなる上に、石塊がやたらに多くあつて思うように進まなかつた。そんな車が何かのひょうしに横倒しになったのは、西の空へ飛んで行くカラスの低い声を耳にした時であつた。政雄は当然のように稲束と一緒に地へ放り出され稲の下敷きになった。政雄は悲痛な叫びを發した。それと呼応して、激しい雷雨とともに、瞬く間に大粒の雨が二人を襲つた。しかもそれに合わせるかのように、脇を流れている小川が見る見るうちに大河と化し、ほとんどの稲と一緒に政雄までも素早く呑み込んでしまった。……》

仏壇のある隣りの部屋で、柱時計が六時を告げる。

ありふれた夢であるとはいえ、綾子にとって、それは言いようもない不安を持たせた夢であつた。普段なら六時に決ま

つて鳴く鶏の声も、今日に限って聞こえなかつた。

《新雪が、また相当積もつて寒いのだろうか？》

不安の心でみれば、全てのものがいつもと違つているように思えた。妙に騒ぐ胸を抱いて、綾子は少しも動かなかつた。

「かか！ かか！……大変だ」

和代の大声に、薄暗い台所で朝食の仕度をしていたトメは、手を休めて、声のする方へ小走りに駆けて行つた。

「そんな大きな声上げて！」

怒鳴りつけるような口調のトメに、
「だって、卵を取りに行つたら死んでいるんだもん」

既にべそをかかんばかりであつた。

「それに、いつもの半分しか卵が」

「寒かつたんだ。仕方がないさ！」

「五羽もだよ。……それにオラ……」

寝間着姿で二人に近づいて来る綾子を見て、歪んだ顔の和代は手に持つていた卵をなおさらしつかりにぎりしめた。

《やはりこんなことが……》

綾子は、夢の中でかすかに聞いたカラスの鳴声が思い出された。

部落には、古くからの言い伝えて、カラスが朝鳴くと誰かが死ぬという迷信があつた。別に迷信を信じているわけでもないが、戦争中もあり、出征している夫や兄弟に思いを馳

せる時、朝のカラスの鳴声は、大きな不安を持たせるに十分だった。それが、ただ鶏の死という小さな出来事ですんだ。

綾子はほっと胸をなでおろした。

「死んだのは鶏でよかった」

だが自分が大切に世話していた鶏が、五羽も死んでしまった和代は、崩れんばかりにして二人を恨めしそうに見た。そんな和代の頭や肩の雪を、綾子が払ってやったが、和代の不機嫌は朝食が済んでも直らなかつた。

不安が鶏の死でほとんど形を留めなくなつた嬉しさに、綾子は鶏の世話をよくする妹の気持ちを察してやらなかつた自分を、苦笑する余裕もできた。

綾子も和代もやがて自分の部屋へ引込んで、また、トメは独りになっていた。茶碗を洗う手元が雪明かりでより白く見え、井戸水が生暖かく感じられた。

水仕事の後、トメは独りぼっちの炬燵に入り、ぼんやりと戸の間から外を眺めた。雪は全く止むことを知らないように降り続いた。淡い灰色のように見える牡丹雪が、所狭しとわが物顔をして踊り続けているようで、新雪の量は昨夜から軽く三尺は超えていた。

トメは雪の降らない地方が羨ましかつた。南の戦地に行っている息子らが、また思い出された。

「戦争なんて嫌だ。勝っても負けても、後からきつと悔やまなければならなくなるのに」

音もなく降り積む雪を見ながら、語りかけるような気持ちで、兵役に服している子供達の無事を祈つた。

炬燵から出て、再び一仕事をする為に納屋へ向かう用意をしていた。

「――オラを呼んでいる!」

トメは一段と耳を澄ました。凍つた微かな声が遠くの方でした。

「川口さーん」

雪に吹き消されそうな声が、次第に近づいて来る。

「川口さーん」

静かな雪の中に確かに声は聞こえていた。トメは急いで入口に走つた。

水気を多く含んで、開閉の悪いそまつな木戸をあけると、一面の雪でまぶしいほどであつた。高い木々の太い幹も、松や杉などの常緑樹も、すっかり雪に覆われていて、一瞬全てが見えなかつた。

「川口さーん、道はないのかねえ?」

男の叫び声のする方向を見遣つたが、真っ白の雪の中に、黒い点を見ることが出来なかつた。

「川口さーん」

前よりもでかい声だつた。

「へよりによつてこんな時に、訪れて来るなんて」
白い眩しさの中に、一人の男が腰まで埋もれながら、近づ

いて来るのをようやく見付けた。男もトメに気付いたらしく、軽く手で合図をした。すっかり普段の道が消えて、男は歩きにくそうであった。

やつのことでトメの側まで辿り着いたその男は、顔から湯気をたてながら、

「川口トメさんですね」

と、低い声で尋ねた。

「はい」

「電報です」

「御苦労さんでしたのお」

雪が受け取った電報にまで降り注いだ。トメはそれを濡らさないように、しっかりと胸に抱いて家の中に飛び込むと、身体中に付けた雪をも払わず、履物を履いたまま、電報を開いた。

4

「――間違いだ！ 政雄が死んだなんて」

それは二男政雄の死を告げる公報であった。

トメは立ちつくしていた。嵐のように怒濤をくんで激情が迫った。

「政雄が、政雄が……死んだ。間違いだ。何かの間違いだ。

死んだなんて！ あの子が」

驚きが悲しみに。悲しみが怒りに。怒りが混乱へ。そして

驚きが去ってしまふと、思い出したように涙が溢れてくるのを、トメにはどうすることも出来なかった。

嗚咽で体を震わすトメは、冷気で魂を失ったように、顔を蒼白にさせた。震える手に握りしめた電報を、雪と涙が濡らしていた。

「政雄が死んだ」

「政雄が死んだ」

虚ろな心でトメは、何度となく繰り返した。

どれほどの時間が過ぎていたか、トメにはわからなかった。ふと我に帰ると、強い風に吹かれて真っ白になり、まだ木戸の前にしゃがんでいた。余りの驚きに腰が抜けたようであった。

トメは入口の木戸をも閉めずに、半分這いながらようやく土間に上がり、雪も払わずそのまま炬燵に潜り込んで身体をできるだけ小さく丸めてしまった。

自分の身体から畳の上に落ちた雪が、じわじわとしみこみ、小さな広がりを作っていた。無意識に炬燵槽の足をしっかりとつかんだまま、蒲団に伏せた目で、トメはその広がりをじっと見つめていた。

どうしたことが、何の感情の動きもはや感じられなかった。

表情を失った顔は、空間を見つめたまま動かなかった。時計が何時かを告げていた。数えるともなしに虚ろな心で数え

ていたトメは、少しずつ現実へ引き戻されていた。

トメは、ひどく濡れた電報をまだしっかりと手の中に握っていた。

「ニイガ タケン サントウゲン

コシジ アザ ツカノヤマ××番地

カワグ チ トメド ノ」

やはりトメははっきりと認められる宛名の文字に、政雄の死を信ずるよりほかなかった。

それから、木戸があいたままの玄関から吹き込む小雪混じりの風が、土間を濡らすのも気付かぬほど、顔を蒲団に伏せ声を殺して泣いていた――。

「寒い風が入って来ると思ったら、前があかっているじゃん」

ぶつぶつと怒った和代の声がして、雨戸の閉まる鈍い音が聞こえた。トメは、はっとして顔を蒲団にこすって涙を拭いた。

「あの子にはまだ聞かせてはいけない。どうして兄の死を知らせることが出来よう」

トメは狼狽せんばかりであった。しかし、和代はトメのいることに気付かないまま、また自分の部屋へ立ち去った。ひそやかな足音を耳にし、はっと溜息をついたトメは、台所へ行った。冷たい水で顔を洗うと涙はおさまったが、心は虚ろだった。腫れぼったい目瞼が鏡に悲しく映った。まるで息子

の顔のように見える自分の顔を、トメはしばらくじっと見ていた。

その時部屋から出て来た綾子は、トメを一目見て思わず足を止めた。胸に何かが刺さった。

一語小さな声で話し掛けた。

「何かあったのね？」

トメは黙ったまま、その汚れた顔で返事をした。

綾子は話そうとしても、その言葉の持つ意味の恐ろしさに、言葉が声にならなかった。トメの顔が歪んで崩れた。震える手で握りしめられた電報が、目の前に差し出された。いやおう無しに目の中に文字が飛び込んでくる。

「政雄が……」

そう言っただけ、泣き伏す母親の悲しみが自分にも伝わった。

「嘘よ。……絶対に……」

「嘘だ」とは言っただけのもの、最後はもう半ば弟の死を信じるかのように、弱い呟きになっていた。

「和代にはまだ黙っておくれ。……あの子に、今教えるのは余りにも」

トメは涙で声を詰まらせながら、溢れて来る涙を拭おうとせず、綾子の孕んだ身体を心配するように庇った。

そんなうちひしがれた二人を、冬の冷たさが追いかけるように包み込んで行くのであった。

田や畑以外に働く場所を持たない村人は、雪が降るようになると、決まって酒蔵や糸繰りなどの出稼ぎに出るが、年が迫ると大半の者は、村に戻って来て新年を迎えた。しかし、ここ数年、戦場に行っている若者が多いためか、その数はずっと少なくなっていた。それが豪雪の中の村を一層静寂にしていた。

大晦日の朝には、診療所のたった一人の老医師も、正月を家族と一緒に祝う為、ひっそりした村から柏崎へとぼとぼと帰って行った。

村外れの小さな神社に、新しい注連縄しめなわが取り付けられていた。はかばか、どの家からも餅つきの音を聞くことが出来なかった。

「明日は元日だと言うのに」

トメも心から正月を迎えるような気にはなれなかった。

和代と一緒に今年最後の餌を豚や鶏に与えながら、トメはこの一年間を振り返った。それは、戦争を度外視しては考えられない十二カ月であった。一月に長男一郎を、六月に次男政雄を戦地に送り出し、今月の政雄の戦死。思い出すトメの目が、またいくらか潤んだ。

「来年こそは、どうぞ良い年でありますように」

近々生まれる初孫のことを考えると、悲しみの中にも言い

知れない期待と喜びがあった。

トメはちよつと手を休めて考えた。

「男の子かなあ、それとも、女の子かなあ」

すぐ側で鶏の世話をしていた和代は、トメを見てニヤニヤした。

「何考えているの？」

トメは微笑をうかべるだけで、答えようとはしなかったが、久しぶりに見せた母の明るい顔に、和代はますます好奇心をかきたてられた。

「ねえ。何考えているの？」

訊かれれば訊かれるほど笑うだけで、トメは答えようとはしなかった。

「当ててみようか？」

トメはニコニコしながら頷いた。

「赤ん坊のこと？」

——奥の部屋で昼寝をしていた綾子は、その和代の大きな声で、思わず目がさめた。

「今何時かしら？」

冬の短い日が、もう薄暗くなり始めているのが窓を通して見えた。床から離れようとした綾子は、腹の中でいつになく激しく動くものを感じた。

その直後、初めての陣痛の徴候があった。

「誰もが経験してきたことなんだわ」